

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500872

研究課題名(和文) 東北の刺し子の文様特性に関する研究

研究課題名(英文) Pattern characteristics of Sashiko Stitching in the Tohoku region of Japan

研究代表者

千葉 桂子 (CHIBA, Keiko)

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：80188482

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、従来の「刺し子」研究にはなかったアプローチを試み、異分野とのリンクの可能性を拡げ、東北地方の衣生活文化の再考に資することを目的とした。1年目は福島県と山形県の刺し子について調査を行った。2年目は、青森県の刺し子について調査を行った。3年目はこれまで調査した刺し子の文様について、幾何学的なアプローチを試みるとともに、文様の意味について古来の文化的・宗教的・東北地方の地域的背景を探る必要があることを確認し、そのための基礎的な情報を把握した。

研究成果の概要(英文)：Purpose of this study is reconsideration of the clothes life culture of the Tohoku region of Japan, for widen the possibility of the link with the different field, to try the approach that there was not for prior studies. In the first year, an investigation about Sashiko of Fukushima and Yamagata was carried out. And in the second year, for Sashiko of Aomori, too. In the third year, geometric approach was tried for these Sashiko patterns and basic information having been grasped for the old cultural, religious, regional background of Tohoku.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学、生活科学一般

キーワード：生活文化 東北 刺し子

1. 研究開始当初の背景

2008年度から、在住する福島県や隣県の山形県に伝わる布や衣服に関する手仕事に関心をもっていましたが、大学生を対象とした意識調査から地域の生活文化に対して関心が希薄な状況を把握した。その希薄さの積み重ねが、そこに住む人々を物理的にも精神的にも地域離れへと導くことは簡単に想像でき、結果として地域の担い手の弱体化につながる事が懸念された。そこで、地域の生活文化を新しい視点で見直し、その意義について問い直す必要があると考え、被服学を専門とする立場から東北に伝わる「刺し子」に着目した。

東北には日本三大刺し子といわれる「津軽こぎん」「南部菱刺し」「庄内刺し子」が伝えられ、福島県南会津地域でも製作されたと伝えられる。ほとんどの先行研究においては、刺し子が成立した過程について東北の貧しい生活の状況から必然的に生まれたこと、さらにそれを作り続けた結果、精緻で芸術的要素を伴うまでの文様が考案され表現されてきたことが述べられている。しかし、文様そのものの装飾上の意味に深く着目したものはみられず、東北の衣生活文化を再考するためにも、文様の特性について検討する必要があると考えた。

2. 研究の目的

上記に述べた背景を踏まえ、従来の「刺し子」研究にはなかったアプローチを試み、異分野とのリンクの可能性を拡げると共に東北地方の衣生活文化の再考に資することを目的とした。

具体的には、東北地方の刺し子にみられる文様に着目し、その文様の呼称と地域の方言との関連性を調査し、衣生活文化の地域性について把握することをめざした。さらに、各種刺し子の文様のモチーフについて、幾何学特性について「17種のウォールペーパー・パターン*」の定義に基づき、規則性について明らかにすることをめざした。(*: 平面上に繰り返されるあらゆる模様は、対称性により分類すると17種になるという数学のトピックス。参考: 藤田伸「17種のウォールペーパー・パターンについての形態表現案」デザイン学研究、Vol. 53, No. 3, 2006) しかし、研究を進行させる中で、文様の幾何学的特性を明らかにするためには、他の観点からの分析が有効であるという専門家からの助言を得て、修正した。

3. 研究の方法

本研究の方法は以下に示す通りである。それぞれは、3年間の研究期間中に必要に応じて並行させながら進めた。

(1) 文献により、東北の刺し子文様の調査およびビジュアル資料を収集した。

(2) 青森県、山形県、福島県内の博物館・資料館において、刺し子の文様のビジュアル資

料を収集した。さらに、福島県の仕事着における刺し子の認知に関しては、研究協力者の支援を得て、奥会津地域における若干の衣生活の言葉に関する調査を行った。

(3) 福島県指定重要有形民俗文化財「会津の仕事着コレクション」に収蔵されている刺し子が施された仕事着を中心に情報を電子化し、データ・ベースの作成を試み、web上で公開した。

(4) 刺し子の文様の中でも、幾何学的な文様が特徴的な「津軽こぎん」と「南部菱刺し」に関して、数学的特性について比較・検討を試みた。

4. 研究成果

(1) 福島県の刺し子について

福島県の旧南郷村(現在の南会津町)に伝わる「南郷刺し子」は、仕事着でありながら吉祥文様の刺し子によりハレ着として使用された興味深いものである。その仕事着を収蔵している奥会津博物館南郷館において、実物資料の写真資料と文献の収集を行った。また、(財)会津民俗館(猪苗代町)に収蔵されている福島県の民俗有形民俗文化財「会津の仕事着コレクション」において、「南郷刺し子」を含む刺し子の仕事着を中心に、実物資料の写真及びそれら仕事着の採集地、時期等に関する情報を収集した。中には、福島県だけではなく舟運で結ばれていた阿賀野川流域(新潟県東蒲原郡)の仕事着も含まれており、かつての会津の生活文化の一端を把握することができた。刺し子の文様にも福島とは異なる文様が認められ、文様の特性を把握するためには、現在の自治体の分割ではなく、江戸期以降の生活圈・文化圏に着目することの必要性を確認した。

さらに「会津の仕事着コレクション」の採集地等の情報については、電子化を行いweb上で公開を行うことができた。それらの電子情報の中から上衣(236/476点)について抽出し、考察を行った。最も多かったのがカタビラ(24%)であり、次いでサシコワンバリ(17%)、モッコサシコ(16%)であった。ほとんどの用途が山作業用とされていた。材料は全体的に麻が使用されているが、襟や袖に木綿を使用しているものもみられた。身丈が約70~90cmであり、長着ではないことがわかる。全体の中で刺し子が施されているものは131点(56%)であり、会津地域における仕事着に多用されていた状況が推察された。南郷村で製作されたものには、全面的に模様刺しをすることによって晴れ着として着用されたものがあり、それらは単にサシコと呼ばれていた記録がある。このことから、人々は刺し子を補修・補強の技法というだけではなく、衣服を装飾し価値を与えるものと捉えていたと考えられる。

① サシコワンバリにみられる刺し子文様

製作年月がわかっているものの中では、大正2(1913)年が最も古かった。それらの使用

年代は、昭和 10(1935)年代や 20(1945)年代までのものが複数あり、約 20~30 年間着用された事実もあると推察された。材料は、ほとんどが「手織木綿」であった。半数以上に用いられていた刺し子は「横グノメ刺し」である。(おそらく横刺しも同意)それらは、2~3枚の布を重ねて補強することが主目的として用いられたと考えられる。(おそらくタテ刺しも同様であろう。)他に、文様刺しとしては、肩に「花刺し」「山道刺し」「ヒシ刺し」「矢羽根刺し」がみられる例もあった。用途のほとんどが山作業用ということもあり、物を背負う際の仕事着の肩部の負担軽減のためとも考えられるが、衣服として最も目立つ部分に文様刺しを施すことで、単調になりがちなグノメ刺しに表情を与える効果もあるように思われる。



サシコワンバリの例(福島県)

②モッコサシコにみられる刺し子文様

製作年月がわかっているものの中では、明治 42(1909)年が最も古かった。それらの使用年代は、昭和 10(1935)年代までのものが複数あり、サシコワンバリと同様に、約 20~30 年間着用されたと推察された。材料は、ほとんどが「木綿」であった。(「手織木綿」とは区別されているようである)サシコワンバリで半数以上に用いられていたグノメ刺しは、1 例しかみられず、全体の 6 割にみられたのは「マス刺し」であった。用途としては、サシコワンバリと同様に山作業用であるが、全面的に施したダイナミックなマス刺しは美しく、装飾性が認められる。このことより、モッコサシコは仕事着でありながら、外出着としての性格があり、一種のハレ着的な性格も持ち得ていると思われる。製作地は、1 例を除くすべてが新潟県(旧会津藩領)であった。本コレクションにおいて、マス刺しがその地域に限定してみられる文様であることが意味することについて、今後も追究したい。



モッコサシコの例(新潟県)

③ボロサシコにみられる刺し子文様

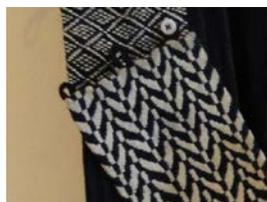
製作年月がわかっているものの中では、江戸時代末期(1860 年代後半)が最も古かった。それらの使用年代は、明治末期(1910 年頃)までのものがあり、約 50 年間という長期間の着用の可能性が認められ、他の 2 種とは異なった。材料は、「手織木綿」がやや少なめながら「木綿」と半々であった。刺し子の文様では、「横刺し」「たて刺し」が少しみられるものの、その記載の多くは「小布合せ刺し」(および布の重ね枚数追記)であった。手ぬぐいの使用も認められた。枚数は、2~4 枚であり、材料を工夫してはぎ合わせていることがわかる。このことから、すり切れたり破損した部分に布を重ねて刺し子で補修しながら長期間使用してきたことが推察できる。その結果、使用期間の長期化が可能となったと考えられる。用途としては冬の作業着・作業下着がほとんどである。保温性を確保するための刺し子であったとも考えられる。



ボロサシコ(福島県)

平成 23 年度 7 月末の新潟・福島豪雨の影響により一部地域に限られたが、研究協力者の方言調査に合わせて奥会津地域における衣生活に関する言葉の調査を行うことができた。調査の中では「図説会津只見の民具」(只見町教育委員会)より引用した刺し子が施された仕事着の写真を資料として被験者に提示し、その呼称を回答してもらったところ、60 代以上の被験者に「刺し子」が認識されていることがわかった。また、20 代・30 代のほとんどでは仕事着そのものが認識されず、呼称も回答されない状況がわかった。(2)山形県の刺し子について

山形県庄内地域の遊佐町に伝わる「遊佐刺し子」を中心に、調査を進めた。遊佐刺し子ギルド代表の土門玲子氏らから聞き取りを行うと共に写真資料の収集を行った。遊佐刺し子は、昭和の中頃まで続いた山から薪を轎に乗せて麓に下ろす作業の時に着る「轎曳き法被」に施された。文様は横刺しからなる特徴的なものであり、福島県の刺し子との差異が認められた。



轎曳き法被の刺し子の一部(山形県)

(3) 青森県の刺し子について

南部菱刺しと津軽こぎんについて調査を行った。八戸市と青森市で調査した南部刺しの資料の多くは「たっつけ(股引き)」と呼ばれる農作業時に着用された下衣や「前だれ(前かけ)」である。たっつけの生地は藍染めの麻(綿も存在したと思われる)が一般的で、その布目をふさぐように刺し子がされていることが多い。また、前だれは、大正時代に入手が可能となった毛糸により行われた。南部菱刺しの文様の特徴としては、横長の菱形を呈することである。それは、刺し縫いする際に経糸を偶数目すくうことに起因している。しかしながら、詳細に観察すると、縫い目のずらし方を奇数にするものもみられ、規則性の中の特異性が認められた。



南部菱刺し「雉の足」文様の例

津軽こぎんについては、津軽藩の現弘前市を中心においてみられる刺し子である。江戸時代に、木綿の着物を着ることを禁じられた農民が麻の着物の布目を刺し縫いしてふさぎ、防寒、長持ちさせる目的で行われていた。青森市で調査した資料は現存する資料は、着物の前後身頃の腰よりも上の部分で刺し子が施されているものであった。こぎんを刺した部分はとても大事にされ、他の傷んだ部分の布を変えて作り直しをしながら着続けられた。その部分のみ売買されたという背景もある。生地は藍染めの麻が基本である。それに、木綿の白糸により、経糸を奇数目すくって文様を表す特徴がある。

文様の特性としては、奇数目をすくうことにより縦長の菱形を呈する。南部菱刺しは、モチーフとモチーフの境界線が共有されて連なっていく傾向が強いが、津軽こぎんは一つの文様のモチーフとモチーフの間に、一定の幅のある縁取りのような文様が連なっている傾向があり、差異が認められた。



津軽こぎん(後ろ身頃)の例(青森県)

(4) 刺し子文様の幾何学的特性

本研究で調査した刺し子の中でも、特に幾何学的な特徴のある津軽こぎんと南部菱刺しについて、専門家の助言を得て数学的な特性について比較・検討を試みた。

織り糸のすくい方によって、津軽こぎんは、縦長の菱形、南部菱刺しは横長の菱形をしている。これらに対する数学的な問いとして、①17種のウォールペーパー・パターンと、菱形の配置や模様の関係、②対称性などに注目した、模様の数学的分類等が考えられる。両者共にほとんどの模様は、ひとつの菱形を平行移動して平面を埋め尽くす形で配置されており、ウォールペーパー・パターンでは同じパターン(cmm)に分類される。いくつか例外は見受けられるものの、ひとつひとつの菱形に着目する方が、よりそれぞれの特性を明らかにするために有効と考えられた。多くの文献に取りあげられている文様を対象とした場合、分類に関しては、菱形を変形して正方形とみたときの対称性に注目すると、津軽こぎんは、上下左右および斜め45度の対称軸について対称、あるいは上下左右のみ対称である模様がほぼ半数ずつを占めていることがわかった。これに対し南部菱刺しはほとんどが上下左右のみ対称であり、津軽こぎんとは異なる傾向があることがわかった。

これらのことから、津軽こぎんが発達した地域ではより幾何学的な模様が好まれ、南部菱刺しが発達した地域では幾何学的な対称性も重視するものの、より植物や生活用品等を模した現実的な模様が好まれているのではないかと考えられる。そのことを解明するには地域の生活文化等も合わせて検討しなければならないと考える。東北の刺し子の文様に含まれる図形の意味については、古来の文化的・宗教的・東北地方の地域的背景を探る必要があると改めて再認識するに至った。この課題についてはさらに、研究を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計2件)

①千葉桂子、会津の仕事着にみられる刺し子の文様について—上衣を中心に—、日本家政学会第65回大会、2013年5月18日、昭和女子大学

②千葉桂子、刺し子を導入した教材開発のための一考察、日本家庭か教育学会東北地区会第35回大会、2013年9月1日、いわて県民情報交流センターアイーナ

〔その他〕

ホームページ等

<http://www2.educ.fukushima-u.ac.jp/~chibakei/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

千葉 桂子 (CHIBA, Keiko)

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：80188482